

武蔵丘の「今」と「未来」を想うとき、どうしても紹介しておきたい先生がいる。私の理想の師であり恩人でもある「モリゾン」だ。「モリゾン」は商業高校の簿記の先生で、本校に直接の関係はない。しかし本校の新しい流れの源泉は「モリゾン」にある。本校で「モリゾン」を知るのは私以外には1、2名しかいない。「モリゾン」は本名ではない。彼の教えを受けた生徒たちが、敬愛を込めて付けた愛称である。晴れがましいことが嫌いな「モリゾン」に、執筆の許諾を求めても<sup>やがへび</sup>數蛇に終わるのは必至だ。ゆえに本名でのご紹介はご勘弁願いたい。

私は高校3年の夏、迷いに迷い抜いて自分の進路を教職に求めることに決めた。おこがましいが、日本を変えるには「教育」しかないと考えたからだ。しかし、晴れて教職に就いたにもかかわらず、十年以上が経過した頃、私は袋小路に迷い込んでいた。「教育」という<sup>なりわい</sup>生業が、どれほどの実体を伴っているのだろうか。教師と生徒との間でどれほど深い関わりが生まれ、人が成長していくのだろうか。教育とは根無し草の「虚業」じゃないのか。この壁にぶち当たった原因が、自らの思い上がりや生き方にあったことを論してくれたのが「モリゾン」だった。

「モリゾン」との付き合いは「不幸」な形で始まった。11年間勤めた初任校から第一商業高校に異動して2年目、昭和から平成に変わったばかり、私は「モリゾン」が主任を務める新一年の担任となった。顔合わせから間もない3月末、私は大きなしくじりを犯した。学年合宿の見積もり依頼を「モリゾン」との相談もなしに進めたのだ。「モリゾン」からこっぴどく叱られた。その稚拙さと愚かさは、忘却の彼方に追いやれずにいる多くの「若気の至り」の中でも最上級にランクインする。しかしその時は、「気を利かして仕事を進めておくのが何故悪い。指示待ち人間の方がいいのか」という身勝手な言い訳が私を支配した。そして「意地」が脳ミソ中を<sup>ばっこ</sup>跋扈する。ギクシャクした関係が続き、会話も必要最低限のみだった。約一年後、「モリゾン」と、その命を受けたに違いない年下のN先生から救いの手が差しべられた。「モリゾンがたまには飲みに行こうってき」・・・ありがたかった。嬉しかった。酌み交わした酒が、愚かしい私の「意地」を洗い流してくれた。

「モリゾン」は苦労人だった。鹿児島から上京し、働きながら都立商業高校の定時制と大学の夜間部で学び、教職に就いた。「生徒を『大人』にしましょう。行動し、結果を出してください」が口癖だった。管理職さえ口にしなことを平然と語り、「行動」と「結果」を求めた。「明日から一週間、朝7時から珠算の補習があります。珠算ができなくても担任が見ているだけで生徒たちは励みになるんです」・・・担任は全員が朝の7時に出勤した。終わると次は簿記の補習。簿記の大きな検定は年間4回ある。それぞれの数週間前から補習が始まるから、実質的には7・8時限目に通年で行う授業と同じだ。そして羨ましいほど生徒はよく着いていく。参加が思わしくない生徒に容赦なく叱咤激励の声飛ぶことにもよるが、何より面倒見が良く、合格率が抜群である。「モリゾン」によれば、生徒の手もとを見ていると、どの問題で<sup>つまづ</sup>躓くのが分かるのだそうだ。検定直前になると、生徒個々に苦手な分野の課題を集中して出す。だからほとんど全員が合格する。失敗すると原因を考えさせ、再チャレンジを求め励ます。生徒たちもその思いに応えようと必死だ。部活動と調整して補習に参加する。やむを得ない事情から休む時でも、事前連絡を欠かすような非礼はあり得ない。自ら進んで問題を解いては「モリゾン」に見せに行く。「モリゾン」は「簿記の神様」との厚い信頼を、生徒からも教師からも集めた「職人」だった。

「モリゾン」は「進路の神様」でもあった。不合格の理由は、当の会社に尋ねても容易には教えてくれない。自弁で菓子折を買い、足繁く訪ねて引き出すのだという。もちろん進学希望者の面倒も徹底して見抜く。面接練習は象徴的だ。できるまで、話せるようになるまで訓練は終わらない。A君の例を紹介しよう。A君の不出来さ

は絶望の域を超えていた。何を尋ねても、名前を聞いても「アー、ウー」としか言葉がでない。そればかりか、入室して歩いてくるとき、体が右45度に傾く。力尽くで直しても、すぐに戻ってしまう。業を煮やして「出て行け!」と一喝された後、家に帰ってしまった彼を連れ戻したこともある。訓練は10回以上に及んだ。さすがのA君も右45度に傾かず、人並みに話せるようにもなった。「モリゾン」がすごいのは、最悪のシチュエーションを想定し、未然に対応をとっておくところだ。「ずいぶん上手にしゃべれますね。学校でしゃべるテクニックの練習をしたんでしょう」との酷すぎる質問。頼むから「2、3回ほど練習しました」で切り抜けてくれとの願いも空しく、A君は「たくさんやりました」と回答。最悪の答えに私たちが頭を抱えた時、A君は先を続けた。「それは、私が大人になるための勉強だったんです」・・・彼が紡ぎ出したのは、就職試験のマニュアル本などには絶対に書かれていない、書けるはずのない最高の答えだった。時に情けなくてしかたなかったに違いない。それでも諦めずに食らいついてきた彼の実感が伝わってくる。「モリゾン」を囲んだその夜の酒は、格別に旨かった。

「モリゾン」学年の卒業後、私は生徒募集と教育課程編成の仕事がしたいと考えて教務部を志願した。受検生の普通科志向が強まってきた上に、改築で校庭は使えず校舎もプレハブだった。入学志願者が激減し、100名、50名と2年間続く二次募集の解決に、ささやかな貢献を期した。「モリゾン」は主任に推挙されたが固持し、一部員として同じ教務部に入った。学校説明会の日、校門周辺から会場や廊下を掃き清める「モリゾン」の姿があった。箒をもって駆けつけると「生徒募集は、掃除から始まる。後でトイレもやっとくよ。一番汚い所を人は見るからね」・・・脱帽だ。価値観が、感性が、格が違うと感じた。どこをとっても達成すべき質があり、それが果たせなければプライドが許さない。第二学期始業式で紹介した「下町ロケット」(池井戸潤著 小学館刊)で描かれた町工場＝「佃製作所」の職人たちが抱く「佃品質」「佃プライド」を彷彿とさせる。

「モリゾン」に一步でも近づきたい。人が成長し、結果に責任をもつ実体ある教育を創りたい。授業は当たり前だ。それを超えて何ができるのか・・・。やっと見いだしたのが「小論文指導」だった。毎週2回、放課後に50名の進学希望者(推薦が多く、小論文が不可欠)を集め、講習を重ねた。文章の基本も知らない。社会科の教員で小論文の実績もない。まして高校時代、お前が書く手紙は意味不明だと友達から笑われてきた。でもここで生徒と勝負し、行動し結果につなげようと覚悟を決めた。自転車操業を続けながら各大学の問題を分析すると、5～6本のテーマで事前を書いておけば、どの大学へも対応できることがつかめた。「ヤジが言っていた問題が出た」という嬉しい報告もたくさん聞いたが、結果は50人受験で49名の合格。完璧な結果は出せなかった。

「モリゾン」との縁は不思議だ。平成9年4月、私が副校長として最初に赴任したのは「モリゾン」の母校だった。「俺の高校時代の資料は絶対に見るなよ」と釘を刺された。「モリゾン」も別の商業高校に異動した。そこで、超難関の日本商工会議所簿記一級や一橋大学への合格者を出すという輝かしい結果を残し、平成17年3月に定年退職された。引く手あまたの中、幸運にも、私が校長を務めていた第五商業高校に嘱託の先生としてお迎えできた。「ちゃんとやれていない、こんなじゃだめだ」・・・待ち望んだ久しぶりの「お小言」だ。そして私が異動後、第五商業高校でも日本商工会議所の簿記一級の合格者を出したとの風の便りを聞くこととなる。

教育は、教師と生徒との人格の相互作用だ。授業はその一部だ。しかも授業時間だけで生徒の理解が深まることは難しい。教師が自らを鼓舞し、智恵と経験を駆使して授業外でも補習等の仕掛けをつくり、できるまで面倒を見抜く。その教員の導きに支え励まされ、生徒が進んで学びを究め、最高のパフォーマンスを実現する。そうした教育が「今」、すべての学年と教科で必要だ。そのために「モリゾン」の遺伝子を継承し、「恋文、そして挑戦状」として贈る。

先生方と生徒全員から、授業、部活動、行事、日々の生活すべてのフィールドで、「全力」を振り絞って書き上げた「返信」が届くことを心待ちにしている。



(注 ご本人にはあまり似ていません)